命あるうちルーツ知りたい

忘れられた同胞 (上)

フィリピン残留2世

「タワラ・トメジロ」。フィリピン西部パラワン州の州都、プエルトプリンセサ市に住むアントニオ・タワラさん(81)は、物心がつく前に亡くなった父の名前を、近所の住民からこう聞かされていた。

1930年代に同市にやって来たというアントニオさんの父は、現地の女性と結婚。樹木の伐採や橋の建設、トラックの運転手などで生計を立てていたが、41年の日米開戦で状況が一変した。

日本軍は真珠湾攻撃の後、アメリカの植民地だったフィリピンへ侵攻、占領した。アメリカから独立を約束されていたフィリピンでは、急激に対日感情が悪化。ゲリラが日本人移民を襲撃、殺害する事件が頻発するようになった。

戦時中、父を地元の反日ゲリラに殺害された残留2世のアントニオ・タワラさん(右)。「生きているうちにルーツを知りたい」と訴えている=7月3日、フィリピンのプエルトプリンセサ市

無国籍状態…「時間たつほど困難な身元特定」

反日ゲリラに殺害

アントニオさんの父も開戦後まもなく反日ゲリラに拘束され、荒野に連れて行かれて穴を掘らされた上で銃殺されたという。「自分が日本人だと言ってはいけない」。アントニオさんは母から厳命され、戦後も母方の姓を名乗った。

一家の大黒柱を失い暮らしは貧しく、まともな教育も受けられなかったが、警備員などの仕事で生計を立て、懸命に生き抜いた。支えになったのは、母から繰り返し聞いた「お父さんは優しい人だった」という言葉だった。

昨年末、現地に発足した日系人会を通じて、NPO法人「フィリピン日系人リーガルサポートセンター(PNLSC)」に、諦めかけていた父の身元探しを依頼。今年4月、初めて職員と面会し、思いの丈を伝えた。

80年ごろに見つかった自身の出生証明書には、父親の欄に「トメデロ・タワラ」と書かれ、出身地は「横浜」とあった。残された手がかりはこれだけだ。高齢でリウマチや糖尿病を患い、体調は悪化している。「日本人である父を誇りに思い、生きてきた。元気なうちに父の、自分のルーツを知りたい」と声を絞り出した。

平均年齢は80歳超

戦前日本の国籍法や当時のフィリピンの憲法では、「子供の国籍は父親の国籍に準ずる」と定められていた。そのため、アントニオさんのような2世は日本人のはずだが、父親の身元が分からないため、戸籍を確認できず、日本からは国籍を認めてもらえない。

仮に父親の身元が判明しても、子供が生まれた際にフィリピンから日本の本籍地の役所に書類が送付されていなければ、戸籍に子供が登録されていない可能性が高く、フィリピン、日本双方の国籍を持たない「無国籍状態」になっている。日本国籍を回復するには、新たに父の戸籍に登録する「就籍」の手続きが必要だ。

ただ、2世の平均年齢は80歳超。記憶が薄れていたり、うまく意思を伝えられなかったりするケースも多い。アントニオさんと同様に父をゲリラに殺害されたというアンヘリータ・ヤマモトさん(75)=写真=も、そんな一人だ。

兄から聞いた話では、父の名前は「タミスケ・ヤマモト」。周囲からは「モト」と呼ばれ、戦前のプエルトプリンセサ市で一番大きい商店を建てるなど腕の良い大工として知られていたという。

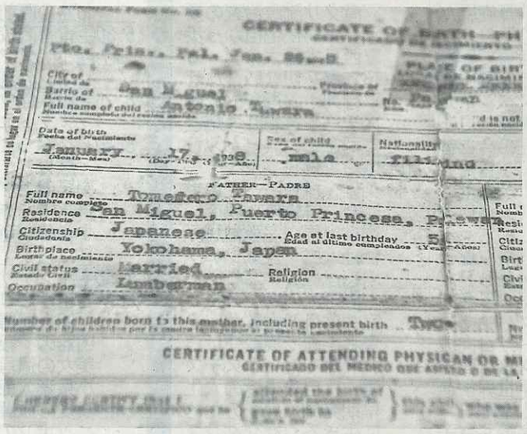
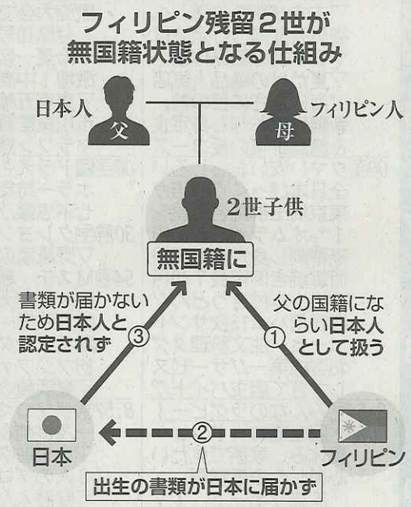
ただ、70年代にマニラの公文書館で見つかった両親の結婚証明書には、父の名前は「オノラト・ミデル・ヤマモト」、出身地は日本の「Olea」と書かれていた。日本語としては奇妙な名前や地名だ。「日本語が分からない係官が口頭で聞き取り、記録した可能性がある」。PNLSCの猪俣典弘事務局長は、こう指摘する。

フィリピンで生まれ育った2世が、父の名前や出身地を正しく記憶できているとは限らない。過去には「シロカベ」と申告していた2世の本当の名字が、「ツルオカ」だった例もあった。猪俣さんは言う。

「時間がたてばたつほど、身元探しは困難さを増す。あらゆる方法を模索して思いに応えたい」

◇

戦前、多くの日本人が新天地を求めてフィリピンに渡り、必死に働いて家族を持った。しかし、先の大戦が全てを奪い去り、現地に取り残された2世が無国籍状態になるという悲劇があった。「死ぬ前に日本人だと認めてほしい」。終戦から74年を迎える今、忘れられた残留2世の声に耳を傾けたい。(1面参照)



アントニオ・タワラさんの出生証明書。父の名前は「Tomedero Tawara」、出身地は「日本」「横浜」と書かれている (いずれも橋本昌宗撮影)